

氏 名：寶 田 穂

学 位 の 種 類：博士（看護学）

学 位 記 番 号：乙 第1号

学位授与年月日：平成19年 3月20日

学位授与の要件：学位規則第4条第2項該当

論 文 題 目：薬物依存症者をケアする看護師とピア・スタッフの体験
—ケアにおける無力感の意味—

EXPERIENCES OF NURSES AND A PEER STAFF
WHO TAKE CARE OF DRUG ADDICTS: IN THE
PERSPECTIVES OF POWERLESSNESS AND
HELPLESSNESS

論文審査委員：主査 武 井 麻 子

副査 濱 田 悦 子

副査 守 田 美奈子

副査 福 島 道 子

副査 鶴 田 恵 子

論 文 内 容 の 要 旨

【研究の背景】

現在、薬物乱用や依存は世界的に重大な問題となっている。日本においても政策として薬物乱用対策が立てられてはいるものの、精神科病院では治療が難しく、薬物依存症からの回復にはセルフヘルプの力が大きいとされている。医療の場では薬物依存症者は厄介者扱いされることが多く、看護師も手をこまねているのが現状である。申請者は、これまで専門的治療病棟のない病院での薬物依存症者の看護についての調査を行ったほか、ブラジルでの薬物依存症者の治療と看護の実態について調査を重ねてきた。

【研究目的】

本研究の目的は、薬物依存症者のケアについて、当事者である薬物依存症者本人、看護師、回復支援施設のピア・スタッフにインタビューを行い、その語りを通して、それぞれの視点から、薬物依存症者への看護の意味を明らかにすることである。

なお、薬物依存症者へのインタビューは、すでに公表しているため、本論文では、看護師とピア・スタッフへのインタビュー結果から、それぞれに語られたケア体験の特徴を描き出し、薬物依存症者の語りと照らし合わせながら看護の意味について考察する。

【研究方法】

- ・研究デザイン：半構造化インタビューによる質的帰納的研究
- ・参加者およびデータ収集方法：

①看護師：薬物依存症者への治療プログラムをもつ2つの精神科病棟に勤務する男女12名の看護師。

②ピア・スタッフ：自らも薬物依存症者であり、現在は地域で回復支援施設のスタッフとして働いている女性、1名。

- ・分析方法：インタビューの逐語録をもとに、データのコード化を行い、経過に沿っていくつかのテーマを抽出し、再構成した。そのうえで看護師とピア・スタッフの語った内容の比較を行い、それぞれの共通点と差異を検討した。

【倫理的配慮】

自由意思による研究参加、研究の目的と趣旨、秘密の保持、データ管理及び処分方法、結果の公表等について、参加者に文書と口頭で説明し、文書で同意を得た。組織の管理者にも同様に文書でスタッフの研究参加について同意を得た。

【結果】

1. 看護師の薬物依存症者へのケア体験

参加者（看護師）は、薬物依存症者に対し、わがまま、迷惑行為、グループ化、規則破り、暴言・暴力といったネガティブなイメージを多く語った。また、一所懸命看護して、たとえいったん薬物を止めても、再使用する患者が後を絶たないことから、「達成感がない」「もどかしい」といった感情を体験していた。その一方で、薬物依存症者が「崩壊していく恐ろしさ」や、家族や友人を失っていく「寂しさ」も語られた。薬物依存症者は看護師にさまざまな葛藤を引き起こしていた。

なかでも患者の不安定な攻撃性は、多くの看護師を脅かしており、自分が患者を「刺激しないよう」、また、患者の挑発に乗って「刺激されないよう」に、自分の感情を抑え込もうとしていた。また、多くの参加者が、薬物依存症者に対して「巻き込まれない」よう、「気持ちで負けまい」としていると語った。

しかし、やがて自分の力で薬物を止めさせようとしても無理なことを認め、薬物を止めさせることへのこだわりを捨てることができた参加者は、患者への関心が高まり、些細なことでもポジティブな変化として気づくことができるようになった。

2. ピア・スタッフの薬物依存症者へのケア体験

同じ質問に対して、ピア・スタッフは自分の生い立ちから語り始めた。母親から虐待されながらも「超よい子ちゃん」であった彼女は、高校時代に薬物依存症になり、セルフヘルプ施設で回復した。そのため、自ら回復支援施設を設立してからは、自分が一所懸命関わればかならず回復すると信じて、薬物依存症者のケアに携わっていた。ところが、思うようにはいかず、自分の限界に気づくようになった。

それからは患者や家族の話をよく聞くようになり、自分の思い込みに気づくことができた。また、メンバーから共感される体験を通して、初めて自分が共感されたことがなかったことにも気づいた。今では多様性を受け入れられるようになり、「薬物を止めさせる」という思いよりも「良くなってくれたらいいな」という思いでいる。

【考察】

看護師とピア・スタッフとは、それぞれの道のりは違っても、「薬物を止めさせよう」として、もどうにもならない体験を通して、ケアの限界や自らの無力を自覚するようになり、それからケアに変化が起きた点では共通していた。

看護師は、入院した薬物依存症者に対して恐怖や不信感、孤立感などのネガティブな感情を抱いていたが、薬物依存症者もまた、看護師に対して同様な感情を抱いていた。つまり看護師と患者との間には感情的な面で対称性が見られたのである。

しかし、看護師の感情には、「崩壊することへの恐怖」や「寂しさ」など、薬物依存症者への共感が潜んでもいた。看護師が「気持ちで負けまい」「巻き込まれまい」と必死にたたかっていたのは、すでに患者に共感し巻き込まれていたからであり、その結果として、外傷性の体験をもつ薬物依存症者への共感疲労から「達成感のなさ」や無力感といった感情が生じていたと考えられる。

しかし、看護師が自らの無力を認め、「薬物を止めさせる」ことへのこだわりを捨てることができると、薬物依存症者の大きな変化ではなく、ちょっとした小さな変化に気づくようになり、そこから互いにポジティブな面を見出せるようになった。つまり、無力感ケアの限界を超えるターニングとなっているのである。そして薬物依存症者の心の中にポジティブな看護師のイメージが内在化されれば、究極の状況において支えになる可能性がある。こうして築き上げられる、看護師と薬物依存症者が相互に認め合うコラボレイティブな関係に、両者の回復への小さな希望を見出すことができる。

薬物依存症者のセルフヘルプの基本的指針である回復への 12 ステップは、「無力を認めること」から始まる。そのためには「底つき」体験が重要とされている。ケアにおいても同様に、無力さや疑い、あいまいさなどに耐える「負の能力」が求められるのである。

論文審査の結果の要旨

本研究は、申請者が 10 年近くにわたり、一貫して追究してきた＜薬物依存症者への看護の意味＞というテーマで、地道に積み重ねてきた研究の集大成ともいえるべき論文である。

申請者も指摘するとおり、薬物依存症者の治療と看護は、現在、国際的にも大きな社会的課題となっている。にもかかわらず、精神科医療・看護において、もっとも困難な課題として残されたままになっている領域でもある。その難しい課題に一貫した問題意識と明確なテーマを持って挑戦してきたことの意義は、まず第一に評価されるべき点であり、論文博士としての意義も大きいといえる。

また、研究の第 1 ステップである薬物依存症者自身のインタビューをもとにした論文は、すでに原著として公表されており、本論文では、この第 1 論文と、看護師とピア・スタッフのインタビューでの語りを分析した第 2、第 3 ステップの研究を本体とするこの論文とを、どのように統合し、なおかつ一つの独立した論文として纏め上げるかという困難な課題に申請者は挑戦するこ

とになった。しかも、3つの研究成果を本学の学位論文執筆要項に規定された長さにまとめなければならないという厳しい制約のなかで、これをやり遂げたことは、評価されるべきものである。

病院で薬物依存症者をケアする12名の看護師と、回復支援施設のピア・スタッフ1名という、立場も人数も異なる参加者の語りを比較することの妥当性には、異論がないわけではなかった。しかし、自らも薬物依存症者であるピア・スタッフが、薬物依存症者ではない第3者にここまで腹を割って語ることはほとんどないだろうという現実的条件のなかで、たとえ1人であれこれだけの語りを引き出すことができたのは、それ自体、評価されるべきことであり、申請者が長年研究者として薬物依存症者の回復支援に貢献してきたことの成果といえる。

本論文には、自身の看護経験に裏打ちされたデータが豊富に盛り込まれており、明快な文章で現場の状況が説得力をもって分かりやすく描かれている。そこから看護師の感情面での体験が薬物依存症者のそれと対称性をもつということが、理論的な説明とともに明確に記述された点は、本論文のオリジナリティといえよう。

また、薬物依存症者の看護に絶望し避けたいこと自体、彼らが抱える深刻な問題への共感ゆえであること、そこで患者を変化させたいという看護師自身のこだわりに気づき、自分の限界を認めることが、患者との関係をコラボレイティブなものに変えていく契機となること、患者の回復と看護師の成長が平行なものであることなど、本研究で明らかにされたことは、今後の薬物依存症者の看護だけでなく、さまざまな慢性疾患の看護にもいえことであろう。同時にそれは、看護教育にとっても重要な示唆を与えるものといえる。

専門委員会は、以上のような質疑応答を行った結果、本論文を学位規則第4条第2項に定める博士（看護学）の学位論文としてふさわしい水準にあると認め、「合格」と判定した。